慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの価値論に就いて（三）
Sub Title	
Author	加田, 忠臣
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.8 (1919. 8) ,p.1072(120)- 1075(123)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190801-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陳列品は數限りなく集まり、豫定の會場のみには如何ともなすに由なくして、多數の謝絶をなした程である。當時、發行したる案内書に曰く『本會は一般公衆に向つて都市計畫なるものゝ概念を與へ、苟も、同一都市に居住するものは、その職業、財産、區域等の相異れるを問はず、その間には必ず何等かの聯絡あることを示し、納税者に對しては、税金が如何に有効に使用せられ、納税は取りも直さず、最大利益を收むる投資であることを周知せしむるを以て目的となす』と、猶、詳細の記事はその報告書たる、都市計畫及これに關する事業なる書に載せられてある、今や、この一舉に刺戟せられてか、或は他に機運の熟するものありてか、都市計畫なる問題は近代生活研究の重要題目たるに至つた。

アダム・スミスの價値論に就いて（三）

加田忠臣

一、スミス價値論の要領（既出）
二、スミス價値論の本質（前號所載）
三、勞働價値說に於ける勞働の意義（本號所載）

（十三）

スミスの價値學說の本質が勞働價値說なるは、以上詳述せるが如し。扨て次に問題たるは其勞働價値說に於ける勞働の意義如何と言ふ事是なり。

スミスは價値を決定する勞働の分量を二つの方面より觀察せり。其一は交換の方面にして、其二は生産の方面なり。スミス曰く「財の價値は、之を自ら消費せずして他の財と交換せんと欲せる所有者に對しては、其財により購買し又は支配し得る勞働の分量に均し。……すべてのものの眞の價格即ち其物を獲得せんとする人に對する眞の費用は之を獲得する勞務と手數なり」と。(1) 即ち交換の方面より價値を見るときは其大さは其財の支配し又は購買し得る勞働の分量によりて決定せられ、生産の方面より見るときは、價値の大さは其の財の生産に投ぜられたる勞働の分量によりて決定せらるとせるなり。價値の決定は財の支配し得る勞働なりとするものを、Labor-command Standard と言ひ、生産に費されたる勞働が其財の價値を決定すとする說を Labor-cost Standard と稱するを得べし。(2)

而して、スミスが財の生産に費されたる勞働と財の支配し得る勞働の分量とを以て相等しきものと解せるは次の章句に依りて明かなり。

"What is bought with money or with goods is purchased by labor, as much as what we acquire by the toil of our own body. That money or those goods indeed save us this toil. They contain the value of a certain quantity of labor which we exchange for what is supposed at the time to contain the value of an equal quantity."(3)

斯くの如く財の生産に費されたる勞働と其財の支配し得る勞働とが相等しきを承認するにあらざれば、スミスの價値論は其前提に於て矛盾するものとなるに至るべし。されどマルサスが其著 The Measure of Value Stated and Illustrated, 1823 に於てスミスの價値論を評して、

"In laying down labor as a measure of value, it is allowed that he (Adam Smith) does not make it quite clear, whether he means the labour which is worked up in a commodity,

or the labor which it will command; yet they are essentially different."(4)

と言へるが如く、生産に費されたる勞働と財にて支配せらるべき勞働とは全く別種のものとせり。以下若干の學者の所説を參考しながらスミスが其何れに重きを置けるかを研究せんとす。

（註一）Smith:—op. cit. vol. i. p. 32.
（註二）Whitaker:—op. cit. p. 21.—
（註三）Smith:—op. cit. vol. i. p. 32.
（註四）河上博士、「アダム・スミスの價値論に就いて」三田學會雜誌第七卷第一號七二—三頁より引用す。

（十四）

ジェームス・ボーナーは其論文「アダム・スミス」の中、價値の標準を論ぜる條に於て銀は短期の、穀物は長期の價値標準に適し、勞働は不變の價値標準なりとのスミスの説を紹介し、其勞働の意味を次の如く解せり。

"By 'labor' here Adam Smith means the labor purchased by an article, not the labor involved in the making of the article; but he finds it hard to hold this distinction, and to keep the senses of the words clear."(1)

而して、其好著 Philosophy and Political Economy に於ては「アダム・スミスはフィジオクラアトと同じく、使用價値を研究することなく、其注意を全然交換價値に向けたり。彼は、交換價値の通常の標準尺度は貨幣なりとせり。……されどすべてのものの購買力の眞の秤量標準は貨幣によりて表はされたる價格にあらずして、購買者が其財を以て支配し得る勞働の分量なりとしたり。販賣者の見地よりすれば、彼の販賣する貨物は其代償物の有する勞働購買力の大小如何によりて、其價値を增減す、而して、購買者の見地よりすれば其購ふ貨物の價値の大小は、之が彼の勞働を省き又は他人の勞働を購買し得る程度如何によりて決定せらるるなり」と言ひて前論文よりも詳細に其所見を述べたり。(2) 即ち彼は交換過程より見て Labor-command Standard の説を採れるものなり。ボーナーに從へばアダム・スミスの價値論は其價値起源論に於ても又其價値標準論に於ても財の支配し得る勞働の分量なる説を採れるなり。されどボーナーは如何なる論據に依りてかゝる斷定をなしたるかを明示せざるが故に彼の唯一の根據はスミスが交換せんとする人に對する財の價値は支配せられたる勞働の分量の大小によるとなせるに依りたるものと見るの外なし。されど吾人は又一方に於て物を獲得せんとする人に對する物の價値が投ぜられたる勞働の分量によりて決せらるるとスミスが明言し、且 Labor-cost Standard が其第一卷第五章以外即ち價値の標準又は秤量を論ぜる條以外には著しく顯はるるを知るが故にボーナーの斷定に對しては贊意を表する能はざるなり。

（註一）Palgrave:—Dictionary of Political Economy. vol. III. p. 413.
（註二）James Bonar:—Philosophy and Political Economy in some of their historical relations pp. 156-157.

マーシアル教授のリカルド價値學説批評（上）

鈴木清吉

本篇は Alfred Marshall 教授の Principles of Economics, Appendix I を譯出せるものなり

一

リカルドの一般讀者に對するや、大に其廣汎周密なる事實上の知識に基きて論をなし、之を「議論の解説、論證、前提、」の爲めに用ひたり。